



人間牧場主・年輪塾々長  
若松 進一

## 温泉から広がる地域の活性化

私が「温泉」という言葉を耳にしたのは、小学校六年生の時の修学旅行でした。八幡浜から船に乗って豊後水道を渡り、別府で泊まる一泊二日の旅は、戦後間もないこともあって、家族旅行など殆どしたことのない私たちにとっては非日常的で、まるで夢の世界にでも迷い込んだような大きな驚きの連続でした。市内の至る所から白い蒸気が噴き出る別府湯の街を、ケーブルカーで登った薬天地から眺めたり、亀の井バスに乗って若い女性のバスガイドさんの流ちょうな案内で巡った地獄巡りなどの、少年の頃の印象的な思い出は、年老いた今でも心の中に深く焼き付いています。別府を日本屈指の温泉地にしたのは、「別府観光の父・別府の恩人」と讃えられる、愛媛県

宇和島市出身の油屋熊八なのです。

油屋熊八は「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」というキャッチフレーズをつくり、その看板を富士山頂付近に建てたり、温泉マークを別府温泉のシンボルマークとして愛用するなど、様々なアイデアを使って別府の宣伝に情熱を傾けましたが、日本初の女性バスガイドによる案内付きの定期観光バスを運行させたのも熊八でした。「旅人を懇ろにせよ」（旅人をもてなすことを忘れてはいけない）というのも熊八の口癖でした。

別府が一大温泉地として名を成していた頃、別府の奥座敷と言われながら、それほど知名度のなかった湯布院を、今日の日本を代表する温泉地にしたのは亀の井別荘の中谷健太郎さんや玉の湯の溝口薫平さんたちでした。彼らは綿密な作戦を練り、戦略と戦術を駆使して「牛喰い絶叫大会」や「湯布院映画祭」など、マスコミが飛びつきそうな奇抜なアイデアを次々と大ヒットさせ、日本中を驚かせました。それまでの日本は、温泉と言えばうらぶれた湯治宿の存在でしたが、湯布院では人が集まる「楽しい・新しい・美しい」の三つのキーワードでまちづくりを行い、温泉のイメージを根本か

ら変えて行きました。多分「温泉から広がる地域の活性化」を日本で最初にやって成功したのは、湯布院ではないかと思うのです。私たちもまちづくりの駆け出しのころ足繁く湯布院に通い、中谷さんや溝口さんたちの指導を受けましたが、そのしたたかな油屋熊八に相通じる部分に加え、団体旅行から家族や仲間旅行への旅のスタイルが変化することを彼らは、いち早く感じ取っていたように思うのです。

最近わが愛媛県松山の道後温泉が何かと話題豊富で、特に若い女性には人気があり、「行きたい温泉地」で度々一・二位に選ばれています。これまでの温泉地は湯上りに浴衣を着て土産物売り場をぶらつき、時には射的やスマートボールに立寄るようなイメージがありました。道後温泉では温泉を芸術とコラボさせるなど新しい感覚の温泉地に変身しようとしています。それは別府にもない、湯布院にもない新しい時代の温泉スタイルの幕開けかも知れません。

かつて島根出身の竹下登総理大臣が「ふるさと創生一億円」という、奇抜な事業を行いました。この事業は市町村規模の大小にかかわらず、それぞれの自